

〔展評〕

春陽会第十七回展

『国民新聞』 昭和十四年五月三日、六日、八日

春陽会展評

今泉 篤男

(一)

春陽会は、現代の絵画が滔々として感覺主義の方向に走るのを極力食ひ止めやうとしてゐるかに見える。昔、草土社の画風が、印象派ばやりの吾国の洋画壇にブレイキをかけた伝統を享けて、よく言へば現代の仏蘭西畫派の影響の下に覆はれてゐる日本の油彩に一脈の反省を促すやうな意思的な態度を示してゐると思はれぬこともないのである。現在の展覧会の中では、恐らく春陽会の会場が一番一般的には暗澹とした深刻な顔貌をしてゐるであろう。何か造型の骨格を追求しようとする気構へばかりが横溢してゐるのである。その気構へが敬意ばかりではなく氣になるのは、それが画面の効果に仕上がつてゐないで、画作の姿勢として鑑賞者に強ひるところが多いからだと思ふ。そして何より私の言ひたいことは、激しいジェネレーションの推移の中に、この展覧会の多くの画家がむきになつて意氣込んでゐる態度も現代の多くの鑑賞者の共感と可成りに食ひ違つてはゐるしなにかといふ事実である。

○ ここ両三年の春陽会展の中では中川一政氏の油彩の仕事に興味深く注目してゐる。目立たない推移であるけれども、ぢりぢりと敵に迫つてゆくやうな勉強である。春陽会の長老組では本格的な油彩の仕事に四ツに組んでゐるのは中川氏一人と云つてよいかも知れぬ。今年の「牧の郷」といふ絵は力の籠つた作品であるが、私は中川氏の画面がもつと冷たい光を放つやうになれば真実の油彩の美しさが一層加はるだらうと思ふ。マティエルの緊密な使ひ方ではあるが、何と云つてもマティエルに就いての古風な感覺から脱し切れず、その為に画面が油彩独自の深いニュアンスを持つて来ない。その極端な例は、石井鶴三氏の油彩である。紙墨の作品はあのやうな清澄なトオンを持つのに、油彩となると色あせた感じである。

○ 木村莊八氏の作品は、骨格のしゃんとしてゐて、色調にねばりはあるが、色調に対する解釈は幾分浅い。椿の背景の夫々の色彩によつて、椿の描写を巧妙に描きわけてゐるが、基調の色彩にもつと生彩のある輝きが欲しいと思ふ。これはどうにもならない作家の意識からはみ出したジェネレーションの感覺の差異であらうか。

○ 例へば、遺作の並んでゐる、倉田白羊氏と福井謙三氏の作品に就いても、その個性的な様式の相違といふ点に注意されるのである。倉田白羊氏の作品はけれども、篤実な觀照で貫かれた好意の持てる作風で、独特な日本

洋画の古いタイプの良い面を示してゐる。福井氏は仏蘭西畫派のマニエルを持ったマティエルの暢達ちやうたつなよい画家であつた。大作を余りしなかつたうだが、春陽会ではもつと認められていい作家だつたと思つてゐる。両者に、時代によつて距へだてられた畫技に対する興味の焦点の違ひがはつきりと感じられる。

『国民新聞』 昭和十四年五月三日



故福井謙三 《黒い帽子》

(二)

今泉 篤男

近頃、新しい傾向の日本画の作家が厚く塗る技法を使つて、洋画の真似をするなどとよく非難されてゐるけれども、これは一概に非難出来ないのであつて、日本画の従来の材料では兎角畫面が綺麗ごとに終始し、近頃のいろ／＼な欲望に膨れた日本画家にとつては、その材料では表現上の体当りが困難な場合の事情は想像されるのである。尤も従来とも胡粉もこの盛上彩色などの手法は伝統的に使はれてゐるのであるけれども、さういふ裝飾的でない顔料の激しい馳驅追求される傾向がある。ところが日本だけに比べて概してマティエルの塗り方が薄くなつてゐるやうな傾きがあると思ふ。これは比喻すれば東洋畫の肉体と西洋画の精神が歩み寄つてゐるかのやうに觀られぬこともなお。近代西欧畫の傾向に、東洋画の肉体の持つ清潔と純粹をうらやむ方面のあることは事実である。

○

春陽会の作品の中には繪具を旺盛に盛り上げる技法が、近年目立つて多くなつた。鳥海青児氏の画面の繪具は年毎に部厚くなる。鳥海氏の作品は春陽会中で決して凡庸の作品ではなく、その表現の目標も低くはないのであるが、このマティエルは必然の域を超えてドクマティックである。離れて見てゐると、表現の焦点は水墨画のやうな澄んだものを持つてゐるので

あるが、必要以上に盛上げられた絵具の陰影が混濁させる感がある。

○

薄いマティエルの技法で津田正周氏が「兎」や「建物」を描いてゐる。小柄な作品ではあるが画面が柔軟に澄んでゐて、一服の清涼剤である。然し津田氏の今年の出品作はイーゾーゴイングでよくない。この画家にはもつと明確な近代絵画の意^{いき}企と表情を持つた作品を期待出来ると思ふ。

二見利節氏の「うつぶせの女」という作品は、鳥海氏等の手法がフォオヴィズムから来た絵具の厚さとすれば、二見氏のものには印象派から来たマティエルの厚さで、それが比較的必然的なトオンを作つてゐてよい。

○

加山四郎氏の今年の作品の中では「鋸」「機」など、平板に塗つて強い線で包んだマッスの表現に何かさっぱりとした味ひがあつて、例年の作品より遙かに面白くなつた。畫面にもつと撓^{たわ}めが出て来ればよくなるだらう。

○

小穴隆一氏の畫面は、美しく塗つてはあるが色彩がバラバラである。調子のアクセントが平板だからであらう。調子の美しい作品に田中善之助氏の小品がある。

『国民新聞』 昭和十四年五月六日



加山四郎

《面》

(三)

今泉 篤男

先日或る機会に、現在の文化の段階にあつては、如何なる前衛派の画家いゝとと雖も画家といふ仕事は、もはや古典的職業になつたことを自覚しなければなるまいといふ意味のことを書いたら、或る友達は、いやさう云ふ自明なことは総ての画家の承知してゐることで、今更そんな自覚を画壇に望んだところでどうにもならぬと話した。然し私は矢張りさう云ふ自覚の不足が真実の意味の畫技の鍛錬をいい加減にさせ、又絵画の中にのみ表現される精神の様相を追求することを怠らせるのではないかと思ふのである。逆説のやうではあるが、さう云ふ自覚がないから絵画が真に近代的な表情を持つて来ないのではないか。極端な例かも知れないが、能のうなどその自覚の上のに立つてこそ、はじめて真の技術も精神も鍛錬されて来てゐるのである。近頃流行の新派の活花が、その自覚を欠いて唯近代主義といふ名称に阿諛追随してゐる結果は、却つて本質的な近代的表情を失つた愚にもつかぬものとなつてゐる。

○
春陽会の多くの作家にその自覚ありやなしや。近年多く見られる新しく取り組んだ様式の作品など並んでゐるが、ここでは真実に新しい様式の仕事にもつと骨身を削つて欲しい。

今年の水谷清氏の仕事は、従来よりも野心が動いてゐて生々として来て

ゐる。造形に対する解釈がいま一つ統一して透徹して来るのを心待ちにしたい。土屋義郎氏の作品は色調は美しいけれども画面の強靱がもう少し欲しい。

○
南城一夫氏のエチュードは、リリカルな表情があり、洪瑞麟氏の小品は素朴な表現を持ち、今竹七郎氏の画面は清澄な觀照があつて、夫々印象に残つた。今竹氏もさうであるが、吉田達磨氏の数点も須田國太郎氏の影響の見られる作品であるが「鷺の群」などよい。須田氏の影響は画壇にもつと強く行はれても、日本の洋画壇を益すること少くないと思ふ。

○
版画の部屋は、課題の多い油彩の部屋を廻つて此處に入つて来ると、さつぱりした素朴感に手を洗ふやうな氣持である。この部屋の作品が美しいと云ふよりは油彩の部屋々々が「美しく」映つて来ないからであらう。絵画は「美しい」ことばかりを能のうとしするのは勿論であるけれども、「美しく」映えないのは困る。春陽会は近代絵画の感覺主義に反省を促すのはよいとしても、それを逆行しなければならぬ理由はないのである。

春陽会は老舗の暖簾の底強さを改めて見せて欲しい。 — 終 —

『国民新聞』 昭和十四年五月八日

水谷清
《犬のゐる静物》



今泉 篤男 (いまいずみ あつお 一九〇二—一九八四)

美術評論家。山形県生まれ。東京帝国大学卒。一九三二年渡欧。パリ大学、ベルリン大学に学ぶ。帰国後、美術評論を始め、美術批評家協会を創立。国立近代美術館次長、京都国立近代美術館館長を歴任。